

特定外来生物

緊急対策外来種

重点対策外来種

アライグマ

学名 *Procyon lotor*



アライグマ科に属する北アメリカ原産の中型哺乳類です。ハナグマやキンカजूを含むこのグループは、在来種としては南北アメリカ大陸にのみ生息しています。日本にはペットとして戦後盛んに輸入されましたが、イヌやネコのようになつかせることは難しく、多くの個体が飼育放棄され捨てられました。日本だけでなく、先進国では世界各地にペットとして輸入され、野生化しています。

適応能力が非常に高く、市街地を中心に亜熱帯から寒帯までの国で生活することができます。近年はカナダでも市街地をたよりに北上しており、人が生活できる環境であれば分布を拡大し浸透していくことができる動物です。日本でも現在全ての都道府県で野生化が確認されており、神奈川県下でも一時期は最もよく見られる野生の哺乳類でした。現在は駆除が進み、以前程の存在感は無くなってきています。



生態

雑食性で、果樹や野菜、昆虫、魚から人の残飯まで何でも食べます。また、木登りや泳ぎも得意で、下水道などの地下空間や家の天井裏も上手に利用します。人の生活のない山奥などでは低密度に分散して生活しますが、市街地近くの緑地では高密度に狭い範囲を利用しています。

早春期に求愛し、春と秋に4頭ほど出産します。日本にはアライグマの天敵がおらず、タヌキのように疥癬症^{かいせん}に弱かったり交通事故に遭いやすい生態ではないため、成長過程で死亡することはあまりありません。イタチのように本能的に人を避けて暮らすこともなく、確保しやすい餌資源と、身を隠すためのわずかな緑地さえあれば場所に応じて行動を変え、どんな環境でも増殖します。単独で活動する個体が多いですが、親離れ間もない兄弟と一緒に行動したり、血縁関係のない個体同士もまれに行動を共にしていることもあります。

決まった生態の型がなく、順応性が非常に高い、野生動物では珍しいタイプの動物です。



木登りも得意

影響

果樹園の食害や家屋の汚損、人畜共通感染症の媒介などの、人間に対する影響が注目されています。原産地のアメリカではアライグマ回虫症や狂犬病など、死に至る病気を伝搬させることで知られており、日本においても注意が必要です。また、野生個体は体に多くのダニをつけているため、ダニ媒介性重症熱性血小板減少症候群（SFTS）にも注意が必要です。

生態系に対しては、干潟のハマガニや湿地のヤマアカガエルなどが補食により減少したことが報告されています。特にトウキョウサンショウウオは、繁殖に必要な水辺が保全されているにもかかわらず、産卵に訪れた成体がアライグマにより全て食べられたことにより消失した地域個体群（久村など）もあります。イタチやタヌキなど在来の中型哺乳類は水辺での補食能力はあまり高くないため、三浦半島の水辺の生物は、経験したことの無い新たな天敵の侵入に特に脆弱であると言えます。



民家の敷地内も利用



アライグマに襲われたトウキョウサンショウウオ



駆除の方法

自治体が無料で箱罠を貸し出しています。使用に際し狩猟免許等は必要ありません。箱罠はアライグマの通り道に罠の入口が面するように設置します。設置場所は平らで、罠がぐらぐらしない場所を選びます。罠の下を掘って餌をとられないよう、舗装面に置くか、罠の下に板を敷く必要があります。通り道から2メートル程度寄せ餌を撒き、罠の中へ誘導します。寄せ餌にはスナック菓子等が適しています。罠の奥に寄せ餌よりも魅力的な食わせ餌を設置します。食わせ餌は場所や個体によって好みが変わり、果物、落花生、煮干し、パン、唐揚げなど、いくつか試してみるのが効果的です。また、他の動物にとられてしまう場合は罠をシートで覆ったり、餌を針金で固定する等の工夫が必要です。捕獲効率は高くなく、箱罠1台を毎日稼働させていて捕獲されるのは年間で平均3頭程度です。

罠は毎日見回り、捕獲されたらその日のうちに自治体に回収してもらいます。捕獲をされた状態で数日おくのは動物愛護上問題があるだけでなく、周囲の個体に箱罠が危険なものであると知らせる原因になります。

最近では、箱罠で危険にあった経験のある個体が逃げ延び、箱罠を忌避する「トラップシャイ」の個体が増加しており、問題になっています。壊れかかっている罠を使用していたり、トリガーが正常に動作しない場所に罠を設置することが一因です。一度捕獲に失敗した個体を再び箱罠で捕獲することは難しいため、罠を設置する際は失敗のないように注意する必要があります。

罠が稼働しないように扉を開けたまま固定し、餌をふんだんに入れて一定期間餌付けを行うと、罠への警戒が解けて捕獲されやすくなります。

なお、トラバサミやくくり罠は、アライグマ以外の動物も傷つける恐れがあるため、外来生物駆除の方法としては不適切です。

アライグマや台湾リスの罠貸し出し
(横須賀市) 環境政策部自然環境共生課へ
TEL 046-822-8528



人畜共通感染症を予防するため、公衆衛生上の最大級の配慮が必要です。箱罠やアライグマが触れたものに触る際は使い捨てゴム手袋を利用し、終わったら服や手を消毒しましょう。天井裏等に糞尿が残っている場合にも注意が必要です。また、アライグマにつくダニは草原にごく普通にいますので、野外でダニに噛まれたあと体調が悪くなった場合は医師に相談しましょう。三浦半島のアライグマからは、レプトスピラ症、サルモネラ症の陽性反応も出ています。ただし、アライグマが病原体を特に多く持っているということはなく、野生のタヌキやネコも同程度にリスクが存在します。

注意

足跡で識別

在来種

タヌキ



道路側溝なども利用し、住宅地まで行動圏として利用しています。疥癬症の流行等で個体数は安定していません。

イタチ



人影の多くない里山の環境を好みます。非常に減少しています。

アナグマ



人の生活圏外の森林を好みます。地域絶滅したと考えられていましたが、近年個体数が回復しつつあります。

外来種

ネコ



リビアマネコを改良し、中世に持ち込まれました。野鳥への食害が深刻な問題となっています。

ハクビシン



中国南部から持ち込まれたジャコウネコ科の動物で、住宅地や果樹園を中心に生息数が増加しています。

アライグマ

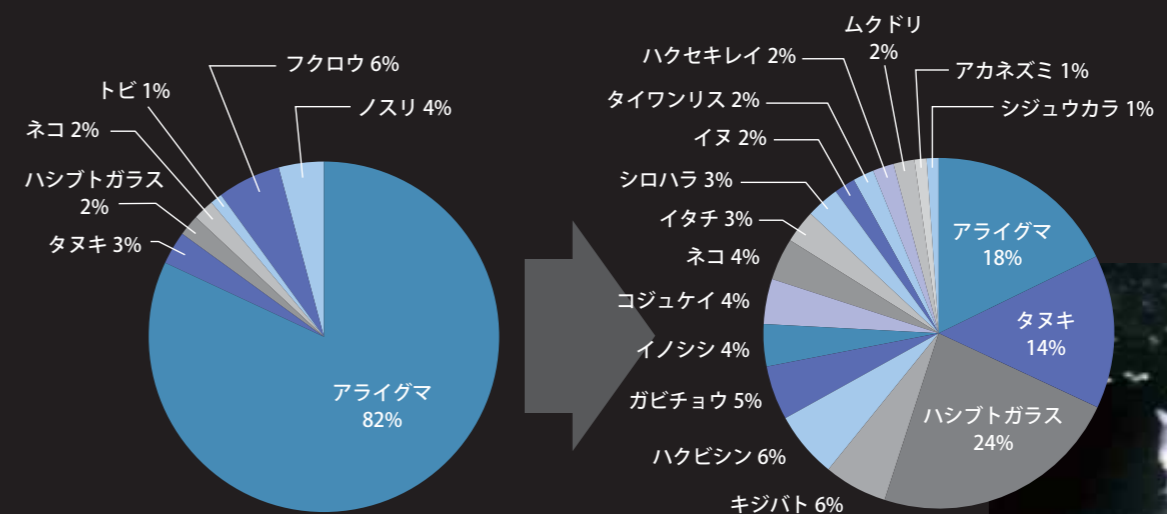


分布の傾向

三浦半島全域に分布します。緑地と市街地が混在する環境や、水辺のある緑地に多く、極度な人口密集地域には少ない傾向にあります。

2000年頃が最も生息密度が高く、自動撮影装置を用いた調査では撮影された動物の82%がアライグマでした。2005年頃から本格的に駆除を進めたことにより、現在同じような調査をするとアライグマの割合は18%程に減少しています。野生生物は最少存続可能個体数を下回ると個体群が自然消滅すると考えられ、より低密度な状態になるよう駆除を進めていく必要があります。

自動撮影装置によって撮影された動物



葉山町長柄 2005年 金田正人

2019年 横須賀